

アウシュビッツの授業に取り組んで30年

東京都立国分寺高等学校 原田 健

1. はじめに

定年退職を前に、最後の研究例会で何か語れ、と事務局から求められたが、自分に自信の無い者(つまり私)にとって語れるものは、過剰に美化した過去の自慢話か、立場から楽になった所での気楽な説教か、役立たない専門的知識のひけらかしか、くらい。誰も聞きたくない内容だ。それならば自分のささやかな授業実践を語ることで勤弁してもらおう、と考え、H21年の8月と12月の合同分科会で、レポートをさせてもらった。

8月の会では、「百年に一度の金融危機 生徒にわかりやすく教える方法とは」というテーマで、①バブル経済とは何か、を全面に出して説明すれば生徒はストーンと納得する(した)、②経済金融を教えるには、世界の経済システムが何であるのかを示す象徴的な事例・寓話を用いよ、③評価の定まった教科書的知識のみを教えるのではなく、現状分析を試みるこそ大切、という話をさせてもらった。加えて、「秋葉原通り魔事件」の心理分析をテーマとした倫理の授業も紹介した。

12月の例会では、私が30年間近く「アウシュビッツ・シリーズ」の授業に取り組んできて、どのような事が得られたのか、どのような心境の変化があったのか、をレポートさせてもらった。以下12月の発表のポイントを記してみたいと思う。

2. 古い教え子に、名前は忘れられても授業内容は憶えている、といううれしい話

去年の10月、某受験業者の合同説明会に私が広報部の「営業」として参加した時の話である。ブース方式での個別相談を行っていたところ、一人の中学3年生の母親が、「もしかして、先生は都内の高校で教えていたことがありますか」「はい、練馬の方で」「やっぱり。わたし、先生のアウシュビッツの授業を受けました」と語りはじめた。明らかに私の名前は思い出していない様子で、授業内容のみ記憶に留めてくれたのだ。このような経験は、この時だけではなく、教育実習生などがもどってくる。「いやあ、先生の思い出といえば、あのアウシュビッツの話です。びっくりしました」等々の会話はよく耳にしていた。

教員になりたての頃から、私はアウシュビッツを教材にした総合学習を、「倫理社会」や「政治経済」や「現代社会」でおこなってきた。その内容は、20年前に都倫研でレポートしたこともあるし、教育雑誌(明治図書「生活指導」)に発表したこともあった。現在の進学重視型単位制の国分寺高校では、センターテスト対応「現代社会」の授業を受け持っているため、さすがに授業の中心に組み込むことはできないが、かれこれ30年近く続けてきたことになる。

3. アウシュビッツの授業構成とねらい

授業の全体構成(は以下の通りである。

一回目 アウシュビッツを知っていますか(ユダヤ人迫害から強制収容への事実の確認・理解)

- 二回目 「E C C E H O M O」より（ナチ収容所のユダヤ人画家達が描いた絵にもとづく理解）
- 三回目 収容されたユダヤ人の心理①（人間的感情の鈍化と適応、他）
- 四回目 収容されたユダヤ人の心理②（抵抗・自己犠牲、他）
- 五回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（歴史・経済・政治・社会心理的説明による大きな理解）
- 六回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（帝国主義と第一次世界大戦）
- 七回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（世界恐慌と資本主義破綻の危機）
- 八回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（ヒトラー・ナチスの政治哲学）
- 九回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（ナチ・エリートの精神病理説）
- 十回目 ユダヤ人はなぜ殺されたのか（フロムの文明史的説明）
- 十一回目 悪いのは誰だ（戦争責任論）
- 十二回目 なぜアウシュビッツを問題にするのか（政治の見かた・考えかた）
- 十三回目 ビデオ「キテイ、アウシュビッツに帰る」（BBC制作のドキュメンタリー）

この授業の狙いは、①インパクトの強い教材で学習意欲の低い生徒を含めて授業に巻き込もう、②社会的な出来事を、単純で一面的な説明で納得してしまうのではなく、歴史・経済・社会心理・思想等、重層的・総合的に見ていこう、というものである。「なぜ、ユダヤ人は殺されなくてはいけなかったのか」という問題意識からスタートして、一つの政治現象を様々な切り口から分析し、それらの要素が複雑に相互作用して（歴史である以上、偶然の要素を含めつつ）、一つの政治現象が生起していくことを知らしめる、ということだ。

4. 最近、萎える「パッション・ミッション・ハイテンション」（斉藤孝）

ここ 10 年間、進学重視型単位制高校で授業をしている。ここ数年、アウシュビッツ・シリーズの授業は、ビデオを見せる程度で終えている。その理由は、校長からセンター対応の「現代社会」をやるよう求められ、生徒・保護者からもセンター対応を期待され、それを実際の得点率という形の数値目標で公表させられる。それゆえ、最近は「アウシュビッツ・シリーズ」をまとまった形で出来なくて、意欲を無くしたのだ、と嘆きたいところだが、どうも理由はそれだけではない。

理由は幾つか考えられる。①テーマの賞味期間が過ぎ去ったこと。私が教師を始めたころ（つまり青年教師だった頃）生徒を前に「いいかい。わたしが生まれた年（1949）の4年前に起きていたことなんだ」と力をこめて語る事ができた。生徒にも、なんとなくリアリティが伝わった。現在は1945年から65年も経過している。「いいかい。65年まえにだ」と私が力をこめて語っても、生徒にとっては前世紀半ばの歴史的イベントにしかすぎない。現在の自分とのかかわりは見いだせない。教材にも時代の制約があるのだ。

②アウシュビッツ以降のユダヤ人。つまり、パレスチナ問題のことである。アウシュビッツ・シリーズでは、ユダヤ人を、ナチスに迫害された可哀相なユダヤ人、というスタンスで語られる。ところが戦後、ユダヤ人がイスラエルを建国してからというもの、立場は加害者にかわる。これが人の世の

現実だ、と説明することは簡単だが、授業としては夢がなさすぎる。どこかに希望がないと教える方もつらいし、生徒にとっても息苦しい。第二の理由である。

③として、自信をもって教えてきたはずのアウシュビッツの内容が、最近の研究によって、だいぶ怪しいものだった、とわかってきたことだ。自分はどうそれを教えてきたのか、と思うと申し訳ない気持ちになる。例をあげよう。30年前、授業をはじめたころは、ガス室によるアウシュビッツでの殺害は300万人だと教えてきた。当時400万人死亡説もあったが、さすがに、それは直観的に多すぎる、と思った。現在では、独政府公認の数で110万人から150万人といわれている。また犠牲者の主たる死因は、ガス室によるものより、栄養失調や過労から、発疹チフスの大流行がおきたことによる、といわれている。ユダヤ人の強制収容についても、はじめから計画されていたとする「意図主義」と、ナチ占領下の混乱をおさめるために生じた政策とする「機能主義」、とに学会の意見もわかれている。

「ガス室はなかった」とするホロコースト・リビジョニスト（修正主義者）の主張も、彼らの証拠を一つ一つ検討してみると、単純に荒唐無稽と言いきれるものではない。もちろん、かれらもユダヤ人への強制収容は認めている。しかし歴史の細部については、よく分かっていないことのほうが多い。分かった顔をして教える教師の仕事は、時に慎重でありたいと思う。

④マンネリ。あまり語りたくないのだが、これが年配の教師にとっての大敵である。同じことを毎年繰り返すと飽きてくる。家ネコも同じえさを毎日あたえると、プイと横を向いて食べなくなる、という話を聞いた。常に新鮮な気持ちで取り組むことは、強い信念や使命感でもない辛いことになる。

5. 改めて思うアウシュビッツの教訓

去年出版された佐藤優の「甦る怪物（リバイアサン）」を読んでいて、唸ったところがあった。氏の専門であるソ連・ロシア情勢の分析をしている箇所、「ソ連崩壊」の主原因を2つあげている。一つとして旧ソ連の経済政策の失敗（ペレストロイカ→民主化→活性化→生産性向上、という仮説の間違い）。これは従来いわれてきた。二つめとして、民族政策の失敗をあげている。ペレストロイカにより言論のしびりが緩み、ソ連体制の未来に見切りをつけた各民族エリート達が、自己保身のために「民族カード」を最大限利用。それでソビエト連邦内の自民族中心主義が高まり、崩壊にいたったという。なるほど、である。より現実的なメカニズムは、著作を読んでもらうことにしたいが、民族主義のエネルギーは凄まじく、「うち者」は一体感でまとまり、「そと者」は徹底的に排除し敵対する。この本能的な感情のエネルギーが人々の心を支配すると、20世紀の中ごろのアウシュビッツを生み、20世紀後半のソ連崩壊をもたらす、と説明できる。

現在の日本では民族問題は大きな課題ではないかもしれない。しかし、少子高齢化社会に突入した現在、外国人労働者にたよる社会に向かっていることは確かだ。居場所の見つからない移民2世の青少年が学校や地域で反社会的行動に走る事例は諸外国でよくみられる現象だ。朝鮮人問題すらうまく解決できない日本の社会では、今後、大きな課題になるような気がする。

世界は21世紀になっても紛争や戦いが止む気配がない。先進国のなかで、唯一65年間、平和が続いている日本。自衛隊は現在まで一兵たりとも外国の兵隊を殺していないという。それは名誉なのか

もしれない。しかし、我々が接する高校生たちは、それゆえ、自分のまわりの出来事しか自分の問題としてとらえられないようだ。この状況を突破するインパクトのある教材とは何なのだろう。アウシュビッツの授業を始めたころは、再び全体主義を復活することは許されない、という使命感が私にもあったし、同僚の先生とも共有されていた。公民科教育における今日の使命とは何か。これらのことを若い先生方こそが考えていただきたいと思う。